グローバル人類学——アメリカ合衆国へのアジア・太平洋移民

Global Anthropology : Asian and Pacific Immigration to the United States

ロバート・フランコ (Robert W. Franco)
（橋本征治・土平博・松本太・矢嶋巌 共訳）

人類学者として，私は「文化」概念に興味をもっている。過去に人類学者は個々の孤立した環境の下での特定の文化を研究してきた。例えば，1974年にサモアで実施した私の最初の実地調査はモアモア村 (Moamoa) に焦点が合わされていた。しかし，今日の人類学者は，かつては孤立していた文化集団が世界経済システムとどのように結び付いているのかという問題と関わっている。アメリカ合衆国への国際的労働移動の研究はその実践の一つの方法である。

国際的な労働移民は，それが自由意志に基づくものであれ，あるいはアフリカからの奴隷労働移住者のような強制的なものであれ，ほぼ500年に及ぶアメリカ史の主要な部分をなしてきた。移民問題は，移民を送出する社会（移民が流出していく社会）と，それを受け入れる社会（移民が流入していく社会）の両方に影響を与えるゆえに，魅力的な社会プロセスである。多くの人類学者は送出する村々を研究してきたが，それを受け入れる社会を研究する者は少なかった。

500年に及ぶアメリカ合衆国への国際労働移民は複雑な多文化社会を創り出してきた。アメリカ史の多くの部分を占める自由移民はヨーロッパからであった。これらの移民は，土地無し＜の状況＞または貧困から逃れ，アメリカでの新しい生活の創造を目指して大西洋を渡ったのである。彼らは再び本国へ帰ろうとは考えなかった。したがって，彼らは，自分達の背後にあるドイツ人・英国人・フランス人・ノルウェー人・イタリア人・ポルトガル人といった文化的アイデンティティとほぼ訣別して，「アメリカ人」となったのである。そして，彼らは自分達の貧困の歴史，借金，時には罪を忘れ去ることを望んだ。

1852年～1875年にかけて，20万人の中国人がカリフォルニアに送出された。これは，アメリカ合衆国へのアジア移民の嚆矢をなした。そのすぐ後から，多くの日本人，朝鮮人，そしてフィリピン人労働者がアメリカ合衆国へとやってきた。この労働移民の歴史は複合的多文化社会の成立に貢献した。今日の人類学者は，孤立した単一文化の研究に加えて，文化間の緊張が常に存在し，かつ増大しつつあるアメリカ合衆国，カナダ，ドイツ，旧ソ連，マレーシア，インドネシア，そして中国のような多文化社会にその注意を向けつつある。

こうした多文化社会においては，社会ネットワークがしばしば移民たちを彼らの母国へと結び付けている。人々は，情報や品物，お金をもって母国と移住先の国との間を行き来する。そして，受け入れ国にいる家族たちは，食べ物，住まい，仕事や健康に関する情報を新来の家族たちに提供する。

遠距離通信は，移民を送出する社会と受け入れる社会を結ぶ社会的ネットワークを覆う情報を人々に与えている。そうした社会的ネットワークが文化的アイデンティティを維持する上で重要な役割を果たしている。

ここでは，多文化社会の一つとして，ハワイ州に焦点を絞って述べたい。まず多文化の歴史を，次いで最近のアメリカ合衆国センサスの指標から多文化社会の状況の今後の傾向について論じる。

1. ハワイのアジア人ならびに太平洋諸島民を通じた歴史

アジア人のハワイとの接触は，ヨーロッパ系アメリカ人の交易船に乗り込んだ中国系の白檀交易商や乗組員がサンドウイッチ諸島（現ハワイ諸島）に逗留するようになった19世紀初頭から中期にかけて始まった。1850年～1880年にかけて，中国人の事業家たちは小ビジネスを確立した。その間に，中国系のプランテーション移民労働者が増え，そのビジネスに加わるようになった。これらの中国人に続いて，何万人もの日本人・朝鮮人・フィリピン人がプランテーション労働者としてやってきた。

これらの移民男性の大多数は，ハワイ人・ポルトガル人・ハオリ[①](*haole*)，あるいは他のアジア人といった異なれる文化集団＜の成員＞と結婚し，いわば国際結婚のはしりをなすか，あるいは故郷に写真花嫁[②]を求めた。

1854年に制定された Great *Mahele*[③]という土地分割法は，ハワイ人の一連の土地離れのきっかけをなした。そして，1893年，アメリカ人植民の利害に基づいたハワイ王権の不法な転覆が，ハワイ人の主権の終末をもたらした。そして，ピュリタン的伝統をもつヨーロッパ系アメリカ人に直面して，土着ハワイ人の文化的基盤は大きく動揺した。

1900～1924年の期間を通じて，アジア移民のハワイ流入が続いた。1924年の移民法が中国・日本・朝鮮からの移民を制限したが，フィリピンからの移民はその影響を相対的に受けなかったことを付け加えておこう。それは，フィリピンがハワイ同様にアメリカ合衆国領土であったからである。なお，フィリピン人は，急速に高まりつつあったアジア移民労働者の初期組合運動を弱めるために，ハワイに連れてこられたのである。

1930年代までのハワイは，明確な数的卓越集団のいない多文化社会であった。しかし，何世代にもわたる通婚によって民族的な壁は大きく壊れていたの

で，厳密にいえば，ハワイは多民族社会ではなかった。中国・日本・朝鮮からの移民はプランテーションから抜け出して町へ移り，アジア人独特の伝統的な起業家精神でもって，チャイナ＝タウンの繁栄をもたらし，ハワイ経済の多くの分野でかなりの成功を収めた。フィリピン人のプランテーションからの動きはより緩慢で，その多くは農村に基盤をおいた建設・サービス部門の職に就くのが一般的であった。

第二次世界大戦は，準州であったハワイにおける日系アメリカ人社会の周りに，はっきりとした民族的な垣根をつくることになった。しかし，ハワイでの日系人の抑留経験は，おおむね抑留政策およびその実施がより乱用されたり，厳しく適用された他の州にみられるほど敵意に満ちたものではなかったようである。また，1959年にハワイが州に昇格すると，地方および連邦の利害にかられた民族的な差別が目立つようになった。ハオリ移民およびアジア系移民は公式的にはアメリカ市民とされたが，土着のハワイ人は不法に主権を奪われた a foreign nation ＜ハワイ原住民にとって，アメリカ合衆国はあくまでも異邦であるという意味＞の市民となった。

1965年の移民法はアジア移民の受け入れ数の復活を斟酌したものであった。ハワイでは，これらの新しい移民はしっかりとした親族集団に加わり，その第一世代はハワイの多文化，多民族社会に文化的エネルギーをもたらした。

1970年以来，ハワイのフィリピン人および朝鮮人のコミュニティは最も大きな人口増加率を示してきた。フィリピン人コミュニティ内部におけるタガログ，イロカノ，ヴィサヤンといった多様性ははっきりと認識されており，朝鮮系小ビジネスマンたちは彼らの起業家的伝統を蘇らせて，ハワイの至る島々に小売店を開いている。

1980年代には，日本，韓国，香港の投資家たちがハワイ経済に巨額の投資を行うようになり，島々におけるアジア人の影響に新しい局面がみられるようになった。建設業が発展し，西オアフ，カウアイ，マウイ，そして大島のハワイ島のコナ海岸には，突然としてたくさんの非常に目立つリゾート地が出現した。新しく，東方旅行する裕福な観光客たちがハワイの観光産業の主たる収入源として貢献している。ゴルフコースは突然として不足となり，また，この観光・娯楽へのアジア人の投資がワイアナエ(Wai'anae)やマウナウイリ(Maunawili)のハワイ系農民の移転の原因となった。

州昇格以来，土着ハワイ人の民族意識はハオリの軍事的，政治的，経済的利害への抵抗として表明されてきた。

ヨーロッパ人との接触およびハワイ人の人口減少に関する政治論争，砲艦外交と土地分割法(the Great *Mahele*)，カホオラウエ(Kaho'olawe)でのアメリカ合衆国の軍事演習，ハワイ島での地熱開発，マウイ島での埋葬論争④，オアフ島で

のＨ３ハイウェイの建設や遺跡の冒瀆，行政およびハワイ人へのホームランド割当における大きな問題，そしてハワイ人の主権回復運動といったさまざまな事件や議論と同様に，1980年代におけるこうしたアジア人の投資と観光がハワイ人の政治的洞察力を鋭くし，ハオリや最近のアジア人投資家に反対して，彼らなりの解決を求めさせる傾向にある。

1970年代から現代に至るまで，ハワイではベトナム・ラオス・カンボジア難民コミュニティが膨張し続けてきた。最初にカリヒパラマ (Kalihi-Palama) 地域に集中したこれらのインドシナからの集団は移民サービスや社会福祉組織に大いに世話になった。より最近では，これらの集団はチャイナタウン地域で仕事に就いたり，ハワイでは極めて入り込み易いサービス経済部門の初歩的な仕事に就き始めている。

はっきりと目に見えて，しかも今にも爆発しそうな状況として，最近ルイジアナ湾岸から移ってきたベトナム人漁師が，沿岸水産資源の減少のために，地元の漁師と競合するという事態がみられる。関連して，アメリカ人，日本人，台湾人，朝鮮人によるマグロ流し網漁や延縄漁がローカル漁業資源を破壊している。

短期的には，インドシナ移民が再び帰国することはないようにみえる。南ヨーロッパ人の場合と同様に，おそらく彼らは強い同化傾向を示すであろう。

1990年代におけるアメリカの民族同化論者の圧力は，1900年代初期の場合より強いのか，それとも弱いのであろうか。

ハワイ諸島に最初の太平洋諸島民が到達したのは西暦200年頃であった。数にして，およそ100人ほどがオアフおよびモロカイの島々に最初の足跡を残している。時を経て，彼らの人口は，第一には自然増加によって，そしておそらくは南のマルケサスやタヒチからの移住によりいっそう増えた。西暦1000年頃までには，モロカイ・カウアイ・オアフ・マウイなどの島々の風上側の，水の豊富な谷々が居住地として開かれ，タロイモ栽培に理想的な肥沃な沖積地が広範に開発された。1500年頃までには，農漁業資源の大幅な余剰と崇高な司祭階級に支えられて，酋長制（チーフダム）が社会的統制上，堅固な支配権を維持していた。人口は30万人を越すまでに増え，あまり生産的でない風下側の谷々にも従属的な傍系親族集団が居住していた。

1500～1795年に至る前史時代は，酋長を巡る激しい対立，絶え間無い戦争，酋長と平民の間の血統的区別の拡大によって特徴づけられる。ハワイ島の乾燥地からでたカメハメハは，マウイの酋長カヘキリ (Kahekili)，そしてヌウアヌ (Nu'uanu) とオアフの酋長たちを打ち負かして，最高位に就いた。

1778年のキャプテン＝ジェームズ＝クックの来訪は，ハワイにおけるハオリとの接触の端緒をなすものであり，またハワイ人のエスニシティの起源をなし

た。ハワイ人にとって，クックとその一行は，自分たちとは異なった他者，すなわち神 (Sahlins, 1986)，または生身の人間ではなかった (すなわち，ハオリ)。クックやヴァンクーヴァ，その他による探検航海の仕官や観測者たちは，土地を豊かにするハワイ人の技術や，主たる島々におけるタロイモ栽培の広がりとその精巧な灌漑技術に驚くとともに，その様子を正確に書きとどめている。しかし，ハワイ原住民の人口を約30万人と推定する点については Stannard (1989) によって議論されている。彼はヨーロッパ人との接触時のハワイの人口は 100 万人に達していたと主張している。

生物学的にみた植民地化の影響は接触後直ちに現れ，最初の75年間に人口比率で85～95%の減少をみ，1850年までには列島に住むハワイ人はわずか 5 万人に過ぎなかった。大規模な土地の分割，ヨーロッパ系アメリカ人達による捕鯨およびプランテーション経済の確立に伴う経済的植民地化が本格的に始まった。このプランテーション経済の進展は決定的な＜ハワイの＞政治的植民地化へと導き，1893年にはハワイ王朝は滅亡した。

今世紀前半には，ハワイ的な生活様式は，徐々にではあるが，確実な崩壊をみせた。賠償請求の試み，とりわけハワイ人ホームランド委員会[5] (Hawaiian Homeland Commission) の活動は，連邦および州レベルにおける官僚の不手際に悩まされてきた。その上，委員会は，土着ハワイ人にとって有益な形での土地開発政策に強い影響を及ぼすだけの積極的な意志と力に欠けていた。ハワイ人の土地利用に対する主要な束縛が連邦政府によってもたらされてきた。特に，アメリカ合衆国軍隊は列島の至るところの海岸沿いの一等地にある広大な地域を接収してきた。

1950～1980年にかけて，土着ハワイ人は，かなりひどい言語剝奪，貧困と失業，低い教育水準，そしてアメリカ合衆国という一つの国家の中で民族的に最も劣悪な健康状態といった，さらなる文化的退歩を経験した。1960年代以来，ハワイ州は観光をベースにした経済に依存してきたが，多くの土着ハワイ人は，それが彼らのアロハ(*aloha*)精神を都合よく利用しながら，その文化的神聖さを奪っていくことを知っている。

1970年代および1980年代において，ハワイ文化復興の大きな運動が始まった。タヒチへ，そしてポリネシアの至る所へのホクレ (Hokule) 号[6]の航海の成功は，文化的基盤を再興し，同様な新植民地主義との苦闘を経験している人々との文化的結び付きを活発にした。アオテアロア (Aotearoa) のマオリに注目して，彼らと共同して，就学前のハワイ系児童のための「言葉の学習の巣」[7] (*Punana Leo* in Hawai'i, *Kohanga reo* in Maori) を設立した。公立学校でのハワイ語浸透プログラムは，K-12システム[8]の全課程を通じてハワイ語教育のためのカリキュラムを急速に開発しつつある。カメハメハ学校での教育調査は，文化的

共鳴教育[9]進展のための国際的・国家的・地方的理解を得てきた。今日，こうした教育技術がオアフ，マウイ，ハワイの公立学校で試験的に行われつつある。

教育開発は次世代の人たちに将来を約束しているようにみえるわけだが，政治の展開はより即効的な機会を与えている。ハワイ人問題事務所およびカ＝ラフイ(Ka Lahui) という二つのハワイ人グループが，それぞれ論を競い，個性を衝突させながらも，かつて委譲した数千エーカーに及ぶ土地に対するハワイ人の主権＜回復のため＞の後押しをしている。これらの土地は，新しい国民，すなわち国家の中の一つの州の中の＜ハワイ人という民族＞グループの基盤となるであろう。そこには，土着ハワイ人だけでなく，その居住が1893年以前のハワイ主権国家＜当時＞にまで辿ることができる誰もが居住することになろう。法律的・憲法的・行政的問題は錯綜しているが，州立法府，国民会議代表，および土着ハワイ人組織の意志は強固なようにみえる。

この新しい国民の創造は明らかに多文化的，かつ国際的(あるいは国内的?)な過程である。それは，非植民地化，文化的な生き残りとその永続化，農村の発達と職業の変化，アメリカ合衆国の軍国主義，外国資本の投下，および移民政策と大きく関わっている。おそらく，ハワイ人は自分たちが主権をもつ土地に復帰することができよう。

1950年代から，他の太平洋諸島民グループが，よりよい教育や雇用の機会を求めてハワイへやって来るようになった。1951年には，アメリカン＝サモアのパゴパゴ(Pagopago) にあった第二次世界大戦中の軍事基地が閉鎖されたのに伴い，約1,000人のサモア人がハワイへ輸送されてきた。サモア人コミュニティはこの40年間に成長し続け，約2万人に達している。ニュージーランドへの移住が大幅に制限された1970年代中頃から，多数の西サモア人がハワイやカリフォルニアへ移住するようになった。事実，1980年のアメリカ合衆国センサスでは，西サモア人は全州においてアメリカン＝サモア人を数の上で上回るようになった。今日では5万人以上のサモア人が全州に住んでいる。

ハワイにおけるサモア人の＜移住＞経験の大きな特徴は，循環移動するという彼らのユニークな＜移動＞パターン，および故郷との結び付き＜の強さ＞にある。アメリカン＝サモア人は，アメリカ合衆国同胞として移住制限の妨げを受けることなく，全州を自由に移動できる。＜一方，＞独立国市民である西サモア人は全州への移住を制限されている。しかしながら，西サモア人は，頻繁に隣接するアメリカン＝サモアに移住し，親しい血縁関係者と同居して缶詰工場とか他の職場で働きながら，アメリカ合衆国への移住手続きを待っている。

ハワイは，シドニーやオークランドから，サモアを経由して，カリフォルニア，ワシントンへと広がるサモア人の移動システムにおいてユニークな地理的位置を占める。一つの中間ポイントとしてのホノルルは，多くのサモア人が現

代における発見航海として東や西へと移動する一つの通過場所となっている。ホノルルへ向かったり，ホノルルを通過するこの移動は，ハワイ在住のサモア人に余分な社会的・経済的な責任をもたらしているものの，それはまた，至る所にいるサモア人と彼らを親しく結び付けている。事実，サモア人はよく故郷へと帰る。また，帰らない場合には，少なくとも，彼らはしばしば，親しい親戚の訪問を通じて故郷と結ばれながら，＜ハワイに＞居住している。今や，サモア人はオーストラリア，ニュージーランド，アメリカ合衆国を結ぶグローバルなファミリーを構成している。さらに世界中のアメリカ合衆国軍基地にサモア人が見られ，特にドイツに圧倒的に多い。

ハワイにおけるトンガ人コミュニティもまた，ニュージーランドへの移住が一層難しくなった1970年代の中頃から，約6千人へと成長した。トンガ人にとってハワイは，東方へという，いっそう単一的な方向を目指す血縁的移動の中継点に当たる。すなわち，トンガ人は，サモア人がサモアへ戻るほど多くは，トンガへ戻ることはしない。これには，次の二つの主たる理由がある。まず一つには，移住障壁を乗り越えて，いったんアメリカ合衆国内へ入ってきたトンガ人は，口論や＜入国ビザを得るための＞待機時期を二度と経験することを望まなかった。二つ目には，トンガ王国内におけるトンガ人の政治的・経済的チャンスは，西サモアやアメリカン＝サモアのサモア人に比べて少ないことである。彼らの成功へのニーズが高まるにつれて，これらの構造的要因がハワイにおけるトンガ人の適応に影響を与えている。社会福祉保護を受けたり，公営住宅を求めねばならないような状況になると国外追放されるので，そうする訳にもいかない。また，ハワイにおけるトンガ人は働き者で，家族想いであるという評判を得ている。1980年のアメリカ合衆国センサスのデータは，トンガ人が国別移民グループの中では二番目に高い世帯収入を得ていることを示している。また統計から，トンガ人世帯が複数の収入を得る戦略を採っていることは明らかである。

それでもなお，ハワイ在住のトンガ人は，新しくハワイにやってきた血縁者を自分たちの家に迎え入れ，彼らを通じて故郷と結び付いている。ビジター＝ビザでアメリカ合衆国へ入ってきたトンガ人は，ハワイやアメリカ合衆国本土のトンガ人コミュニティを次々と回っている。

モルモン教徒のトンガ人はハワイやソルトレークシティの教会を訪問する。これは，さらにオーストラリア，ニュージーランド，トンガ，アメリカン＝サモア，アメリカ合衆国本土にわたって広がる彼らの移動ネットワークにおけるトンガ人コミュニティを結び付ける役目を果たしている。

1960年代から，多種多様の文化的背景をもったミクロネシア人が，連邦政府の奨学金をもらって，より高い教育を目指してハワイへやって来るようになっ

た。中でも，パラウ人とグアム人のコミュニティは，それぞれ約3～5千人の規模の，最もしっかりしたものである。

北マリアナ連合体(CNMI)，ミクロネシア連邦(FSM)，マーシャル諸島共和国(RMI) の樹立協定において，特別条項が設けられ，グアムも含めて，アメリカ合衆国への自由な労働移民が認められている。すでに，その政治的実体と結び付きながら，幅広い移動システムが樹立されつつあり，ハワイへの継続的かつ高いレベルの移動が見込まれている。ミクロネシア人にとって北太平洋は一つのつながった移動システムとなるだろう。そして，彼らの移動は，一つの連合体(CNMI)，アメリカ合衆国に編入された属領のグアム，信託統治領のベラウ，二つの自由連合国家であるミクロネシア連邦 (FSM) とマーシャル諸島共和国(RMI)，州の一つであるハワイをつなげることになろう。この新しい政治地理学的状況が，ハワイ人の主権国家を創造する上で，魅力ある国際的，かつ多文化的な視野を与えている。

2. アメリカ合衆国センサスからみた今後の傾向

この章の諸表は，アメリカ合衆国センサス局レヴィン(Micael J. Levin)氏の中間データ(1990 Census Summary Table File 1A and PC80-S1-12……標本調査)による。

表1　カリフォルニア・ハワイ両州におけるアジア系人口　(1980年，1990年)（人）

民族区分	1990年			1980年		
	両州	カリフォルニア州	ハワイ州	両州	カリフォルニア州	ハワイ州
アジア人	3,258,027	2,735,060	522,967	1,699,605	1,246,654	452,951
フィリピン人	900,367	731,686	168,682	490,453	358,378	132,075
中国人	773,654	704,850	68,804	381,798	325,882	55,916
日本人	560,475	312,989	247,486	508,548	268,814	239,734
ベトナム人	285,691	280,223	5,468	88,641	85,238	3,403
朝鮮人	284,395	259,941	24,454	120,035	102,582	17,453
インド人	160,988	159,973	1,015	60,482	59,774	708
カンボジア人	68,309	68,190	119	5,644	5,586	58
ラオス人	59,735	58,058	1,677	13,314	11,945	1,369
モン人	46,898	45,892	6	785	733	52
タイ人	33,284	32,064	1,220	14,177	13,412	765
インドネシア人	15,147	14,785	362	4,688	4,535	153
その他	69,084	65,410	3,674	11,040	9,775	1,265

〔表1から〕

1) アジア人の人口は，カリフォルニアでは2倍以上になったのに対して，

ハワイでは15%しか伸びていない。

2) フィリピン人，中国人，日本人の人口はそれぞれ，今なおカリフォルニアにおける3大移民人口である。ハワイでは，アジア系の3大人口は日本人，フィリピン人，中国人である。カリフォルニアでは中国人人口が日本人のそれを上回るのに対して，ハワイでは日本人コミュニティが中国人コミュニティよりも大きい。

3) ハワイでは，モン＝コミュニティは大きく落ち込んだのに対して，カリフォルニアにおけるモン難民コミュニティは急激に大きくなってきた。これは，アメリカ合衆国内における難民グループの二次的な移動を示している。すなわち，連邦政府が，1970年代後半から1980年代初頭にかけて，彼らを国中に散らばらせたからである。1980年代後半には，モン難民の多くは家族を見つけ出して，カリフォルニアに住みついた。

4) フィリピン人，日本人，中国人，そして朝鮮人コミュニティのネットワークはハワイへ，さらにハワイを経てアメリカ本土へと，相変わらず強力である。管見の及ぶ限りでは，ハワイとカリフォルニアに住むベトナム人の間の社会的ネットワークについては未だ調査されたことはないし，また母国ベトナムとの社会的絆についても同様である。

表2　カリフォルニア・ハワイ両州におけるアジア系人口の比率（1980年，1990年）（%）

民族区分	1990年			1980年		
	両州	カリフォルニア州	ハワイ州	両州	カリフォルニア州	ハワイ州
アジア人（人）	3,258,027	2,735,060	522,967	1,699,605	1,246,654	452,951
（%）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
フィリピン人	27.6	26.8	32.3	28.9	28.7	29.2
中国人	23.7	25.8	13.2	22.5	26.1	12.3
日本人	17.2	11.4	47.3	29.9	21.6	52.9
ベトナム人	8.8	10.2	1.0	5.2	6.8	0.8
朝鮮人	8.7	9.5	4.7	7.1	8.2	3.9
インド人	4.9	5.8	0.2	3.6	4.8	0.2
カンボジア人	2.1	2.5	0.0	0.3	0.4	0.0
ラオス人	1.8	2.1	0.3	0.8	1.0	0.3
モン人	1.4	1.7	0.0	0.0	0.1	0.0
タイ人	1.0	1.2	0.2	0.8	1.1	0.2
インドネシア人	0.5	0.5	0.1	0.3	0.4	0.0
その他	2.1	2.4	0.7	0.5	0.8	0.3

表3　カリフォルニア・ハワイ両州におけるアジア系人口の増加数と増加率

(1980～1990年)

民族区分	増加数			増加率(%)		
	両州	カリフォルニア州	ハワイ州	両州	カリフォルニア州	ハワイ州
アジア人	1,558,422	1,488,406	70,016	91.7	119.4	15.5
フィリピン人	409,914	373,307	36,607	83.6	104.2	27.7
中国人	391,856	378,968	12,888	102.6	116.3	23.0
日本人	51,927	44,175	7,752	10.2	16.4	3.2
ベトナム人	197,050	193,985	2,065	222.3	228.8	60.7
朝鮮人	164,360	157,359	7,001	136.9	153.4	40.1
インド人	100,506	100,199	307	166.2	167.6	43.4
カンボジア人	62,665	62,604	61	1110.3	1120.7	105.2
ラオス人	46,421	46,113	308	348.7	386.0	22.5
モン人	46,113	46,159	(46)	5874.3	6297.3	−88.5
タイ人	19,107	18,652	455	134.8	139.1	59.5
インドネシア人	10,459	10,250	209	223.1	226.0	136.6
その他	58,044	55,635	2,409	525.8	569.2	190.4

〔表2，3から〕

1) ハワイでは日本人とフィリピン人がアジア系人口のほぼ80%に達するのに対して，カリフォルニアではフィリピン人と中国人がアジア系人口の半数にのぼる。

2) 数的には，1980年と1990年の間に次のアジア人集団が急速に成長している……カリフォルニアでは中国人・フィリピン人・ベトナム人，ハワイではフィリピン人・中国人・日本人。

3) 比率では，次のアジア人グループが最も速く成長している……カリフォルニアではモン人・カンボジア人・ラオス人，ハワイではインドネシア人・カンボジア人・ベトナム人。

5) 両州とも，比率的には東南アジア人を多く受け入れており，その多くは二次的移住に含まれる難民である。

次に，カリフォルニア州とハワイ州におけるアジア系人口の伸び(総数と比率)の順位を示しておく。

表4　数的伸長順位

順位	両　　州	カリフォルニア州	ハ ワ イ 州
1	フィリピン人	中　国　人	フィリピン人
2	中　国　人	フィリピン人	中　国　人
3	ベトナム人	ベトナム人	日　本　人
4	朝　鮮　人	朝　鮮　人	朝　鮮　人
5	インド人	インド人	ベトナム人
6	カンボジア人	カンボジア人	タ　イ　人
7	日　本　人	モ　ン　人	ラ オ ス 人
8	ラ オ ス 人	ラ オ ス 人	インド人
9	モ　ン　人	日　本　人	インドネシア人
10	タ　イ　人	タ　イ　人	カンボジア人
11	インドネシア人	インドネシア人	モ　ン　人

表5　比率的伸長順位

順位	両　　州	カリフォルニア州	ハ ワ イ 州
1	モ　ン　人	モ　ン　人	インドネシア人
2	カンボジア人	カンボジア人	カンボジア人
3	ラ オ ス 人	ラ オ ス 人	ベトナム人
4	インドネシア人	ベトナム人	タ　イ　人
5	ベトナム人	インドネシア人	インド人
6	インド人	インド人	朝　鮮　人
7	朝　鮮　人	朝　鮮　人	フィリピン人
8	タ　イ　人	タ　イ　人	中　国　人
9	中　国　人	中　国　人	ラ オ ス 人
10	フィリピン人	フィリピン人	日　本　人
11	日　本　人	日　本　人	モ　ン　人

表6　カリフォルニア・ハワイ両州における太平洋諸島民人口　　(1980年, 1990年)

民族区分	1990年			1980年		
	両　州	カリフォルニア州	ハワイ州	両　州	カリフォルニア州	ハワイ州
太平洋諸島民	272,868	110,599	162,269	203,867	66,171	137,696
ハワイ人	173,189	34,447	138,742	142,496	24,245	118,251
サモア人	46,951	31,917	15,034	32,436	18,087	14,349
グアム人	27,179	25,059	2,120	18,639	17,009	1,630
トンガ人	11,007	7,919	3,088	3,838	2,356	1,482
その他	14,542	11,257	3,285	6,458	4,474	1,984

表7　カリフォルニア・ハワイ両州における太平洋諸島民人口の比率

(1980年，1990年)　(%)

民族区分	1990年			1980年		
	両州	カリフォルニア州	ハワイ州	両州	カリフォルニア州	ハワイ州
太平洋諸島民(人)	272,868	110,599	162,269	203,867	66,171	137,696
(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
ハワイ人	63.5	31.1	85.5	69.9	36.6	85.9
サモア人	17.2	28.9	9.3	15.9	27.3	10.4
グアム人	10.0	22.7	1.3	9.1	25.7	1.2
トンガ人	4.0	7.2	1.9	1.9	3.6	1.1
その他	5.3	10.2	2.0	3.2	6.8	1,4

表8　カリフォルニア・ハワイ両州における太平洋諸島民人口の増加数と増加率

(1980～1990年)

民族区分	増加数			増加率(%)		
	両州	カリフォルニア州	ハワイ州	両州	カリフォルニア州	ハワイ州
太平洋諸島民	69,001	44,428	24,573	33.8	67.1	17.8
ハワイ人	30,693	10,202	20,491	21.5	42.1	17.3
サモア人	14,515	13,830	685	44.7	76.5	4.8
グアム人	8,540	8,050	490	45.8	47.3	30.1
トンガ人	7,169	5,563	1,606	186.8	236.1	108.4
その他	8,084	6,783	1,301	125.2	151.6	65.6

〔表6，7，8から〕

1)　ハワイとカリフォルニアにおける最も大きな太平洋諸島民グループは，1890年代にアメリカ合衆国によって正式に植民地化されたハワイ，サモア，グアムの島々からである。トンガ人移民は独立国のトンガ王国からである。

2)　ハワイ人の人口は，両州において21.5%の成長を示した。すなわち，ハワイ人の人口は，カリフォルニアでは約1万人，ハワイでは約2万人増えた。ハワイ土着民は，その社会的ネットワークをカリフォルニアやその他のアメリカ合衆国本土に確立しつつある。

3)　サモア人のコミュニティの成長の大部分はカリフォルニアにおいてであった。カリフォルニアではサモア人の人口<増加数>は13,830人であったのに対して，ハワイではたった685人しか伸びていない。サモア人は，インド人やモン人と同様に，ハワイに移住し，さらにそこからカリフォルニ

アに移住したのである。

4) グアム人のコミュニティの成長はほとんどカリフォルニアにおいてであった。すなわち，カリフォルニアでのグアム人の人口が8,050人に増えたのに対して，ハワイでは490人の増にとどまった。グアム人にとっても，ハワイは永住するには魅力が薄れているようだ。

5) トンガ人のハワイでの人口の伸びは108.4%と大きいにもかかわらず，同様なパターンがみられる。

3. むすび

結論として，おそらくインド人とモン人を除いて，ここで議論してきた全てのアジア人と太平洋諸島民にとって，ハワイは彼らの国際的社会ネットワークにおいて重要な位置を占め続けるであろう。日本人，中国人，朝鮮人，フィリピン人，インドネシア人，タイ人にとって，これらのネットワークはカリフォルニアから，ハワイを通じて，彼らの本国へと広がっている。ベトナム人とカンボジア人にとって，これらのネットワークはハワイからカリフォルニアや他のアメリカ本土へと広がっている。彼らが，どの程度母国とつながっているかは，不詳である。

ハワイ人は，今やカリフォルニアから，さらにその先へと広がった社会的ネットワークを形成し，サモア人，グアム人，トンガ人の社会ネットワークはカリフォルニアからハワイや故郷に，そしてその先へと広がっている。さらに，サモア人とグアム人はアメリカ合衆国では本国人同様なので，彼らは故郷の島島とハワイやカリフォルニアの間を自由に行き来している。

明らかに，ハワイとアメリカ合衆国は，今後ともより多文化的になるだろう。この多文化的性格は，よりアジア的，かつ太平洋的なものとなろう。社会科学的研究にとっての，いくつかの重要な今後の問題点は次のとおりである。

1. アジア・太平洋グループが，ヒスパニック，アフリカ系アメリカ人，土着アメリカ人，ヨーロッパ系アメリカ人といった他の文化グループと合同しながら，その独自性を残していく方策はどうであろうか。
2. 労働市場の圧力がグループ間の関係に影響を及ぼすであろう。アメリカ経済はどの程度の国際労働移民を支えることができるのだろうか。
3. 異なった集団がどのようにしてアメリカ経済のハイテク，製造業，サービス部門に参入するのであろうか。
4. アジア人や太平洋諸島民は母国に帰って，その文化的アイデンティティを維持するのであろうか。
5. 世界的にみて，多文化主義の将来はどうなるのであろう。

6. 世界的にみて，多元的地域文化(multilocale cultures)の将来はどうなるのであろうか。

人類家族が強まりつつある世界経済と弱まりつつある地球生態への適応を試みるのに伴って，21世紀には，これらの，そして他の多くの問題が社会科学の前に立ちはだかることになろう。

註

① ハオリ（またはハオレ）は，ハワイ語で「白人」,「アメリカ人」などを意味する。古くは「外国人」,「異邦人」を意味した。

② 故郷に自分の写真を送って，花嫁を求めることが一般に行われた。

③ 1850年代に成立した新しい土地保有制度。この制度の施行期間中にハワイ人の土地保有権の喪失が始まった。

④ リゾート開発業者がハワイ人の古い埋葬地の人骨を暴いたのに対して，ハワイ人たちが抗議した。ワイヘエ総督が仲介して，骨は埋め戻され，リゾート地は他の場所に移された。これは，ハワイ人主権回復運動者たちが勝ち取った最初の大きな勝利であった。

⑤ 1921年に，アメリカ合衆国政府は，1893年のハワイ王朝の不法な転覆に対し謝罪するとともに，ハワイ人を自らの土地に戻すために，この委員会を設けた。

⑥ *Hokule'a* とも記す。1976年にハワイ人の手で古代航法によってハワイ～タヒチ間を往復航海した双胴カヌー。1980年には再度タヒチへ，1985年にはラロトンガへ，1986年にはニュージーランド・トンガへ航海。

⑦ 原住ハワイ・マオリ人の就学前児童が，ハワイ語・マオリ語で複数の教科を学ぶ学校。

⑧ 幼稚園から第12学年まで，公立学校で学べる制度。

⑨ 教室での授業法の一種。

＊ 本文中の＜ ＞内と註は，訳者が補ったものである。

（本稿は，1992年11月12日に開催された関西大学文学部主催の学術講演会でのフランコ博士の講演原稿を翻訳したものである。なお，フランコ博士はハワイ大学カピオラニ校の社会科学部助教授である。）